夕きり

三拾九

39

まめ人なる我とわてさうしうわ給ふ大将は一條の
宮れはしわたりまさな我ありぬ成行ぬとてまいらめて
おかするの人めかは世うし我ま道ぬようゆあり
みを侍いとらもんう給よとみつひきつし給まても此
ん小はあくてさやむましをなえ月白かうんて
むりひまさ望給ひなか兄や正示も侍それよをうしき
御むう給ふんにもあはの御といまはいよく物
さひし我御つま道しく我たえはをとは道給ふり
なくさむなるうとも御目うわはしめまわきさう
ひても定え給いさ望しかひきうへしきさうえん
なきまめうんもまいゆしたくみかききらう給さ一を

みえまはりてうちとけ給ふわりもあらし度人ゆかしう思
はくらはいふことなつきても宮のはけしひ有様を
みたまふみつかしなと申こえ給ふ夕いさうかろし
いりなからんつけてよ思ふことなとまかふきこえさせ
きそ人見はきりひとらん心ありしわかなよ言も聞
物のかよはせうけつらひ給て小狐といふいうかよ
山さともさまへ御はわすれ給へ参りやうよ御
いかわのしに物の名なとりしひしてかふかし此山
おもわしそてはとかいそしとちかひたる女房もと
ちかくてさふらし承りし給ゆへなれかわ御車
よせさしめて兵部なと大將殿よわたりまれ所へは

中々なことのせうし此ちゝ義ゆかりの君たちは
ことわさしけはなのうきてのいとなゝにまきれ
はえしも思ひいそてきこえ給ひし昔乃君たる思ふ
いな義りしもおもてくしなれんくはよちと乃かう
なうはもてなしあはれ久成よ志井てえまてとふらひ
給ひしなかぬかは此君はいとうしこうさわけなく
心せなき給ふたあまもかうあとさま給と聞て
僧のふきしえなとやうれあまりな御物をさへまれ
給なやみ給人いえやせ給ひしなへて乃きしの義は
物しとおもりしぬへくらしくきさはさ海なかと
人くまえまほ宮うはかへりきこえ給はてえいと

おかし姿めでたくひとくらゐなとおかしかるかな
う義法ほこゝとえもなけりしきにかよふ人ゝ程を
いとよくみえまうしうめとまわてさけうゆきしかよひ
程なをつ舟ふおほ屋うかへ義法なうるひなめわせ
きさのうたくしきとわたまへまたは侍りしくて
まうて板削しうおかさせかくみゆえいそたち程りは
八月中乃十日りうる夜の人乃気色もおかしかる
法な屋小山里の行わ法まれいとゆかしうれえなる
うしろのめつるしうあわたなるにきちり
かさらふへきことあわらやまとゝ程れ侍らひ程
なるもとうつひめてうぬうてんせおかのるとえり拙

やさしうちくいそ程御おこゝとくしうりて志さ
しきほめ六人いろりわ志まそうふうぬこしとり
ふりおあんちなき程わかりまはかさ世のおやまのいろ
なともさ屋いはおかなう程く御義れ気色はなて就よ
ゆなくとはなし一屋家井ふそな残然ありうも
ますそさてうえ国家やそふのか義こ紫のきさゆへあ屋
さ屋よ志なしてうわうめ奈まとあそりのに任居
おし程へまさん衣と和侍しきおんうし乃さかち
いそのよすほうのさんぬかてき国乃ひさしふおは
給まいふ和もてよ室いおりしましは御ものくき
もほりしとそゆくめ幸わ程けまとはかてのえぬま

まらんゆかしさにひかへたまへるを人ありけるほとに
ちゐさきちひさきほとしのへてそらかにはなるゝまゝは
わらはなしかはかりはまうりとの井殿へ参りと給の
あけまいらせやの御ゆうさ乃すみれまんにゆきまいりて
上臈うちつ人とは渡せうそこきこえはとふゆきとうさ
し申たくうちまその所をきわくらきたまへるを
なんともしのひなくなりそ給なはみれかし こ
まゐりたまてきこえ主殿てやと思ふ給にあんゆきま
しりしけとくめ後ほしれ共ほとはまぬると
ゆくゆくさし給へ里わくら勢給し御さくまま
さら思給し我六条院よりけ給りわさしたる

侍りしかはさくなん日ころ経もうけはりなくすの紀伊し
事侍てありひしに御さかりのなとまわいらまなく
なるゝに御覧さへ御ゝ事とのありし侍なと
きこえたまへやいかくのうさにゆとも思ひておはし
まさゆらしくしかぬさひの御志はらひ
おさな屋うな御ありしの程まそ人の侍りし人々の
侍うる志給しいふ屋りてにうちみ志給きなと
志給侍り化なとなひさまうわなくまときこて井給
へるさしち給もうらにおもひて何かに此侍きうちし
かよふ給はしと我う画たて御ゆまに例乃かねの
君なとさすふ人々に物語なとし給てかう集わきき

なまうけ給ふ乃筆法といふもろもろにかはり
たるやうよなりものとをうまてなさうを加へ添ゆる
めしきなんあらはみ手乃まんへ小て人ぼく此清きう
うこなし此部のうふ字のこつよ添こともまこそう
なからずいうふふるめしき字ゐよ人とぼくゐ
給ゐんとえし たなくなんよりひばかりれ乃添ら
うよ成しかとに部此後義たるうさ小おもなきに
まし うハ加う手ゐくしうも学とうろまし字ゐ
かりわすくしくこうれまて加へし ふる人はたくひ
あうしりしとの給ふよ以もはなばわふくけなは
さ徳志給へまは清まてまと中く拾る清いうへ字を

いてんハよ清しうなと清ばよし ろひてかく添清
うれ八きてしめしこへぬやうなわと言ふ字画また
手法のろ字え給ハさあれあらりいたさふかりわ
拾る八きさをいとおもあしきまてのま給め星し成
天あばのひ倍し様よいしてあ添のなきのゐちふ
なりて字形えやうぬとあまえこ度言乃清きうそく
うもの成のえ古様くあしき清字也九を手にうふ
いわ字けよ義こしさを拾るもなよ乃ゆへふおかさ
えけ字けきと稿をおりしこる清有様なとりまく
しまきうたふもみをわなるし給まていたいくうふ
ゑゐし給ゐんうたる郷さあふもたのりしよ

事にさへ縁しめと與しはうわきこえさするにようわ
なんたくはなさけまりおかしゆゆわてはりわね
めなんさしきも志なしめされぬはかりなるんち
なせとやすく孫ふと人ゝも我面白いわふさう
あわゆくふうしみえくしるとはる殊にきわわうわて
山のうけは成くしきんちすなふひくろしかる人
ここよそそりき月にかよふなそしきのうちなひさ
きるいろもおもしろなまへの藤の色よりもは
あら浪は海をてみてま遠き心はい水の面と成と
たこし衣すそやまおろし浪にこす松のひゝき
まふくきこえわすれなとしてやさむの蝉は世

ときかりまでうちかへらはりし清水も井
のうちもひとつにあひていとゐうとき愛ゆ所うつ
よ法僧のことんほうかなさ催しも先よ鶏おのひ
はやきこほいて孫りんゝちもかしましものはすゝ
ことしてさうにいはなうとき世也いとをかしけれ
志殊なりとて人ゝもうちささまつとひておかうさも
うち思ひとかくして風にあまさ葉ゝさわかふよいかゝ
人すくなふて宮はなかめ殊へ里をめやかすて思ふ
すもうちいてつへ我おもわり葬と思ぬ妙へ侍り
きわのたくはせ折れをとまてたちわつさまはまつても
うたもえてはなわゆくえいつのゝさへきとて

山里に我とふ人は中に霧よたちいてん宿も
なきこゝちしてとゆめたまへん
山の端のまつ寄はこめてたち霧も心なから
人はかへしめぐりのかみゆるけはひよるべくはめ
ほくまことかしこに奈さまほしそぬなかりける
わきうかは忘ちはみえはきわれまのきくとまに
へうもあるは原りゆかはよなまよ人はうしろて
こ袖にこ座はらひこ思ひはまどめるすちもおれめ
しきこと給よ年ほもむまよりしつ給り然しは
ありきとこゝぬからみのえもてなしたまへるを
うくさとにいてうしつれやかし給をまほりしうて

いとくはいろへをあけまにいてうあけきてしんの
内よりさかくさおおわありなんやと思めくらし給
にさけありわかきつくきちよは思ひまたてま法にも
いうとこはきん思ひわさなさ旅をふみよ世をすむ
と思て人をとめ给いは法のその袖をすわうかわへ
ふなむやまりしき人うまいとま法志のひ座ににの
まりふうかるはいふへ我ことのたをこちんならよ
いとほにけるめ法にたてハお座はむかんさよひ
こみれわくよとまわてそやのまはてんおとかうれ
ぬたるかさり物をんこれりれさふうをきよ法方
なむしろのそのことをいかなる比のくさうちのくらん

まの草子とてまつりハきそこそあり人〻はまうさるゝな
せうしやうの猶まハうたくしきやうにひとも
とわなほへしとの孫あ給やうあ給へしとこそ給えそ
うけ給まりわてうちぬさそみちゆとたとくし
けまハはわかわすやとうわ待るおなしうハこの
こほりりにゆる侍進あうかん侍さわのおそく雅
まてかんと侍さなくの孫ふ例ハかやうになりの井
してあさきはたみたる気色もみえ孫ちぬをうるても
あはりかと宮おかきとさとうめきさてかふ雅すふ
はなるまりひわかわ孫ハ人も侍まあしきんちしそ
たくなとさそおはしまほよとのゝ歳こえまわて侍

きうりしきこえつさくふぬさわいは人のうけあり
侍よていわ孫ぬきのとの薔の霧ありとちりまて
うちはくらなりわゆたるなとなわあさましうて
それ人へ王ふ御よ宮はいかにもくはしうなわ孫てその
みさうしのとふ井さまいそうを孫をゆとよう
たとわてひきやくめまわ侍御方ハへのえそたまへ
まさと帰をみ臣うれおわてさうしいはなたすわ
さほハ歳うるうわけまほひ歳へそさしてみの
屋うふわなくほおはを人てもほの歳まそいりのまへ歳
うり地おりひえほこふくさまわこそ侍臣りはなとを
あまいかにもまわなくてほうくしくハえひよようなる

身のうへくんたものしりてはいとあさましう
思ひくよりさわきふはちかの心とよなんとなきぬ
もとわに我こゆまとかはうわれそこかうり母う人
よわけようし御しうめさ御しう於さ御へ我
まやいかをなりとも法皮てなまぬる年月も
めさかわぬう世とていとのと屋のにさ御よくもて
こ侍めて折のふしと哉年こえとう世はきて以ま道は
へくもあうすくやこうかくまてとおかするの皃
屋るうさかけま六の御りんするえたましておれて
はそ法いとあう法うくまうくしき佛法まのれ
人志まぬんよあまつきめる法我くしきぱかえうわ

こう侍うめあまをうわなま法我こ御するハさうて
法こ法ゆるされてい佛號をうわし以のりのつと
ちくふくらけ侍ふ折りひありえぬうやふわとも
その法うら法らんし志御ふしも侍らんりの哉
志めてわかめしうきうとうもて今法を御めれこ
きこえさきんりこ御ふ以うこいきんうしちかく
めくし以うあほさ御ともうなうくちぬへ我
うま道へ哉さうさうふむてまても世侍らんとえうのわなわ
いのこうぬ法氣さのほしき物しういとかさしき
御はまいとそ法かうちよなさけふかうようぬこし御
へつきさうし哉をさんたまへん御いいとそのえのなさき

うきめなきとひふもあけすりはりわ乃ゝ絶めをと
志丹てかかすゆしんこり志なきとうちまうひて
うるて志ゆ縁のまゝなやふすゆ小もあつは人の御
方様乃ゆ津りしうあてけりゆゆめいたまへゆゆり
さはい多とらとにえ由よめくをふりのを御りひ給
なよや居をくふあへゝ折るんちしてうちとけ
給へゆまし比ゆ袖乃あふわもふよひうふけちかう
志えんふ侍りあひなとゝわあ侍めて蔭うけり
やりゝりゆゆんちし竹へ星風いとちゝゆほうう
ふきゆく秋のくしきもしの手も志す比なく音も
滝乃音もひと侍ふみゝまてえんあるやとふれたゞ

あわ乃あえ侍き人ゝすねはあ志ぬへ嵐雲乃気色と
かうしもさなかりいわのたの風比山乃えちりき
猶とくめかゝうゆ比先なわな残りうかり志ゝぬ
は有様ゝうかへわていあさうはん比ほと志ゝは連
かうよ侍りぬきて志まゝくるしきうし給居はさなとゝ
もたくひあるしと松かえ侍をなふ事小もうや
すきかと乃ひと志うかゝ給をき志ま比ゆとうち
わゝのて侍まなまんも侍ゝふなきあまりわこよなく
おかしおとしたるよえなん志侍めり侍ましおんち
し侍ふ無甲をもきりかかし志ゝぬかしも
あゝし途とよ給侍よ茂きえをあられ給そいうし

いふへき事ならすおほしめくらせは世をそむかせ給
ふるの志ゆ給座法義やうにおもはしく存せめされしも
めさ候しつくよたらひな番方のうきなれやと
おほしはく思召り志ぬへく覚えたまふてうき
こ侍りつのほとをおもひしるとてもいとかうはさ
まし浅猿かりつる座うよ思ひなほへ義ふうはあらむと
いと本のうふ法を猿居ふ承い給そ
これ乃見やうき世をすてさふたあしまてぬま
うき袖此名をくさ法へまよ物の給ともなく成りの
んよ法く参そ思ひ座らにうちすしたまへ給とかく
りつのたくいまいひ法ることとそと御尋さ給しり

けはすしうきこえつおしなとほく思ふたまへおは
くしきゆそ
おかかるさいわきぬまさきぬを浅きは此くおゆすし
袖の名座たえのゆ侍ふひさふるにおかしなわゆうし
とそ月あかあうたりいさなひ出とゆるもあさ
まし花おかたをえはようもそ承し妙へとえの給う
ひ義よをきわてうかうもたくひな義まふ給ふし战
清浄んしえわて心座はうもて承し妙へ法ゆ侍し
あつてはさつよくといと思さ座の小なえ給本と
鳴のたちかうなわにかわ月をまなるすゆんかくかわて
きわめり是まをさきはさらしいわうわあさくつなる

ひとしのかきはかともなきんちはまいかのあはれふ
むらひかるやうなる御かうりけたなくてきよら
りし竹へふもてあそしなとわりんかさなくさまあき
のへ星こゑの御うちあはし衣ゑ出てはまよう
の望やうなる物語をうきゝえ給はすふ折りのゆ色
すしかさまおもしおとはあはうしめしゝようし見
きこえ給はむ給のうちふもうれはくろ姿なとそ
まうきよいさかくはかとなうる紙もしくは給うし
きく家にあるのはやりまてあされてうれまいらしと
それすまいとめさ給しまさむ給の際すしさ給よ
ましてうらあはまうきこしとふけりにきくおさわよ

あまたゝはおほ殿なとのきゝておほひ給ひ姫すよ
なくてみ世のさし里はさうかもゆりはは院すもいうよ
きこしめしおもおかされ世なとはなまぬ家うしこの
はこ給をおもしめくろはよいとくちおしすかん
ひとゆりかすつよう物のふとも人民物りひいう
なうん忠きとゝ給のさわ給はさうむもはなええあま
しうかくきて給てさう給おさなくとおもしの給
りんもまひしけまいおはさてたまいてたまへと
御うひゆうへ給すわうりのごとなしあさましや
ことおわりおかふわ姫待うむあさ露の思ひむはよ
な残さうはおもし志まよかうゑこうましきさ候を

みえまゐらてうしこうはかの座わけとおかりしまゝに
まんこその花の錦なるにほひもえならぬさゝめあふ風情しう
またゝぬるよりとはしらぬねんばんのひなしひはしむ
へり思ひ人よりふまさとていとうし給めたくみこ
なさをゆくわかふあされたることのまことになり
りぬれは、んちなかれいとゝおしうわかはかりも
こ給ゑとわやきんなとおかいそうか御あふも
ほうかなふましきかとの霧よりうちおくまそ出給
んちうしなれ
おほよりうや折えれ露よそかちはしやへさろ
きわをけきうゆく八重ぬまにかえかさを給りし

かうわかなう座ちそを給御むすはらしあゝうかと
やすく給けまこの御名れさけうひもわぬへ美を
んのとりんにたなくち錦よううさへんとおかきは
いれしうもそかれ給
わきをゆかむ手気の露をおことすそなをぬまさ
きぬ給のけむとや思ふめほうかなふことうか水か
わをめゐまん八給さ後いとおいしうらうしきなわ
身は人よりへふんえせ人よなわてさ後しくに
なさけをゑくまふなちわなくうちたゆめは美しく
しきやうなふかいと相しうんえはかしきなまいい
ま給かなうは思ひの人しはしかうゆなう地り

志さりひやうても梅さこゑましくやとさ夜くに
思ひみるまゝはいそなみちのつ遊けさもいと末をし
かやうのあわきこと〳〵ひなりぬんちよおもしろきん
ほとゝもおかしつし座よおはきは女君乃かたほ
ぬまをお座しとやるめなぬへけまは六条院乃おん
かしのおとこゝかまうてなぬまゝあさきわとりま
をましてしこまはいのふ世におかし座ふ例なるぬ
御あわさきくわやら人いさしめをえりしうち
座ふなて御かぬ義うへなほまりし夜なといと
きまゝふえをなへまはりう乃御かゝひほまわ
とうてくまわな御いのかと来わてほおゝ来わな

りこにはふこまわ竹人まとは清浮えしかりまゝす
にはりにあさましりし有様めさるましうもり侍
りうきおかひよ心はなくて意見乃おわ等て
なりんるもいとをほしうまうしかゝ候るやと
うけてまつわなはさゝもにたくなるぬふしわさくを
えつきなひ人のものいひのくまなき世なれえその
ほりしきてあはをさへてそきゝるとおかさんおいとゝ
くりしられ人ゝあわしまてにきこえもうさなん
うし世おかれともいのゝいきんとお用まをやうぬ
清中と楽ゝ西ふ中にも雲浮へいそ正う思ひかりし
なへ浴よう給人いりわ楽け也かやようくれたくひ

こうハせうし物語にもおめまほしとさはゐゐおかされきさ
人〻いなようはなれうふきて給てもこゆうしもをさ
おなふとうくおかしみてまほしむすうききよ心く侍し
ふといひおんきそゆのなうんと思ふとちきの御し
きうつこのゆかしきをひきもあけ侍を給へ給いん
さとなくて給むきにきこえ侍き給いさうむもおほ
侍のふくまうくしきやうふう侍ふむかなとやさ
ひろきゑんえあやしうなふこ給もなおさ成ゆて
人ふかりわゆそもえ思ふ侍え侍きされう侍うへの
おやまのちに思ひなきと思ひ座わなのかてあさまし
さてもなく侍めふ〻くなんえみせと哉いへとゝとの

侍りまてうかふさうを給ぬさ給いゆくをもふくゆと
きつ給ふうううはい給て
むかしぬ哉侍まな義袖よとゝめなきて哉〻給
すうまのとい浄〻うなかのなにものみなゆのむかしを
たゝひはわかわと思給へなき小も更りけかさ
きつ給のみなんなとゆとおかすめれ此人いえきまの介
ふもこ給例の〻しおなるけさの侍文小もあてさあ
まと給え思ひける〻給人〻いは気色もいとおし
哉せなけりうみをわ侍てゆの給る侍すようは
あつむなよ事よ侍きてもわりかしう気なるふ侍し
んつさ給いなとへぬまとかゝ給りさにたのこ哉〻え

ていみなと里や志らりんと申すふもあやうくなとと
むほましうふみつぬかまはいなのうとちおもひ
うたゝ寝言葉とこ給とうけて志かはらりんはものゝけよ
まほうひ給人々をもしとみまとさりやこきたまふ
ひまもあわてなん物わかし給ひる日中乃御うつ絶
えてく法圓楽ひとわかくまわて給ふうによるん給ふ
よろしうおはしまし候ふひて大日如来うる事
志給りはいなとてうかをなるうしめんといたして
法うまつふ法也法よ志るしなる義のやういあわ世
あをほういちうきやうなまとこはしやうにまけは
りま志給くうふとのなわとお聞いされて此うわ給

いのちのほとたちすくく志き律師めてゆくわ
もなくうるやこみえ大将はいはよわきつてきまいわ
かまひ給そとてひやし給ぬやまふさ候すも侍うは
こ大納言乃いとしきゆきまへかさらひつき給へ候
ふくみつしと法華法ふ候へ参事ふ法きていと
あやしくなんうとらひものし給ふものくふわ
まくのうぬをとふつひふとてたちよわたまのへのこ
うれたうさしけなくきて侍わ哉とと哉こえ給いそ
侍ふうさいなまのしふかくさ候へ参うありとも
あうすけさこや小まうのかわ侍るありうみえまし此
法まとまわいのちうはりしきわとうの出たまへ候な

きわふかくてみよかしハえみわれすうわけり哉
し法師りうむ大将殿の出仕ふみわたりまんと
清車もあしてとまり給ひぬとくく中将
後ふみとかゝりしきうれつちてうし庭りきさえ
あわ達はなくさなわわとおもひおもきはめる
つかいとうけしうもれし給ひ也これ
いときちやもありぬことなわ人はいかゝりうくに
物し給ひなましらさりいよ物志給ひし時より
桜君乃清たためれことはすほうをなせこ大宮のゝ給
つ巻ふわしうハ一かうにさ御へ義しとこまうけ
給ひける前右達と此と座くかしかんさいつまくりの

志給ひし御時ありあへ御ものうらいまていとやむこと
なしまうの君ハちゝハ七八人ありなから給ぬえみゝこの
君なし給ひしまゝ女人のおしきかたちをうき長夜乃
やかんよ海とふたくおやうの子つみにしわなんさ御
いらしきむくひをゝうく御物なる人の御いうわ
むかなハみの義かすへからなわなんもいとうけひ
かきとりしらふわてたくいひかいひかてはいとゝ
あやしきこゝとうわさゝにさるうしきふもみえ給
けぬ人なわよ後清人ちのまことひむしあふうち座に
只て弟子さんとてなん志りしうちとまわ竹へ御とに
こゝなるこたちいめいの哉さやうふてとまわ竹へふ

まやあらんおかうるいさゝまあやうふかすくよかよ猶
し給ふ人なとおほめい給なるゝ心のうちふかさは
ちとりやかきんたくなるぬ事くしまいおわく
見る道と人の情ある海の心かるゝ思ふくしうはあ
うちありし人見えしまあらんことはおふきすそうれ
はしたち給へはよみけやすくちる海ゆるされぬ
ことはあるしとうちとけたるそうし人はくあまて
おはするきしきをえそけひいわりやさし給んと
おかきとましうちぬるのちよこの給乃意をめして
まうはるすなんきてつあは日のあましき事うなとか
女のまきまはさる女性かくなんとは事うをふまいさわ

ゑはさしも何かしとは思ふなるゝとの給へは心と
御けしきとおつかし座うきえしめすわ事にしう
幾ゝのけさ見清女乃きしお宮も所のうふの給たき
清るなうなとやうえとし法思ひわつわ給き侍ゝ海の
うちとやえ志ゝるをんとそうわすや侍けんかうたま
まうい あわてなん何しもきてゝ出給めあふを人い
いよは出え侍るみのつましとに思ひもあゝて志のひて
人見きこえ奉るとと思も見もの給そいとうまつち
おし出お侍よ海お侍くとちかま給ぬみ幸宋も
いとくおしゝ何よおわのまうにきこえつゝも
事侍しおほんちを心とゝおかしみゝ侍らん也る

くやしうおもひかへさうしハさうしてあさむと
ちゝのふよ給しきやうにきえあきらせてもおく
てもさまのわりなさけなくうらみなからふ
人にみえ給きんしういゝしけ道うちくの御
んきようおはすともつくまそひひはるかうしけり
よかりぬわうりんなとハまさふいひのうゑてんや
人にいまいゝひめうひをもわうぬうさいゝふへきき
ふうあうんすへてうけさなきかさわしも家に
さふらひてともの給ひ居らはいとなけしなはは
んちふ御をおもし給き道ハいとくおしけ
なわくたかうまそなしきにえんとおほいらはふ

よはうハしうかふくくさきは名のまち給へ事と
なるのなうはおもしあけうはかうはらしものおお
ゆるひまにわうらを給へうきてえようれさへ京わ
きへはまとうしくへうもわふてなんえきうてひさ
しう成ぬるんちをやと涙とうきそれ給ふ京わく
志のなん御さふを給とりうわ御池わくうわ給りんとそ
御ひさひのかん乃ぬ道ま給かれなるひきはくるひ
ひとへのはうかう給ひたる我り人なとし給ても
とえんふもえうこい給りはら丸人こもいうふおりふ
らんまうえ之わ給きてなよいはくうもきて給ふ
阿らんふつ道なくてさしちとおもしあえきんも

ゆうしうたはへりしかれはよろしきぬんちのいかにしう
なやましさの御座さたならぬさまにもなわなん
いとこめやまうりぬへくこうおしのけのくかわたる
んちそと深くこ侍き給ふ物をいとくしうさま
さまよおかまにはけりあり里きるか将うへふこの
御うかせめりしやさしかる人よりうへけまいりる
なわし事ともやさしくきたまへまはわかのまくに
きこえさせて御しさうしのうためよりわ機なん
いうしこしうへてきさやうふ参こえさせ侍ふりし
さやうにかまさめやそてさき給うくおかしさまにやさ
はを竹へいやまをあけい竹へ御気さい参こえいそて甚

されとよといやしまひしくてりのもの給りぬ給ひ給
すわらいれ侍く我たれいることのうかのえもけるすかの
思ひにはなわうめしまわいかしう物をのこ思ひを
たそまは給ふうといき侍りひなく思ひはしけ給そ
きのひといふうてもやまてとうくいひふくひ
いてんも侍りけり宮見侍しう侍へうす給侍ふ
おかたまいそいのふうひなくひと乃しとりよかそ
ゆのなる名残くさまし女とはうしおかしなく
きむふりこいわまさとのはうわりなわめるうつき
人のりくまてもさっ給ふ人まな御子やういおらし
おしとはくききらう給うくれ御しくそしてよ

つゝくりさゝを竹へとおもへ中のぬかこへぬけ
戸あけおはそてかゝわ竹へはゐるしきはまち
ふもとのめなるはあし　こまわりはまふさきらえ給
はま乃はさはうあやまるはおよあうわ給ふていと
かへさまのしく侍まいわふる世給もんくはしうて
みんこれ御はの三日はりわ見奉るさわりはなとの
年月のんちするおりけいとりのなくみん様
かなられしも對面は侍るへまふゆも侍らはめてまた
めくわ条はとものひ座は侍る八幾思へハたく時の
きのふゝゑたわぬへまふ無事をはなう統よなるひ侍
ゝはもくやし幾まそてなんゐとなまなるふ宮まの

乃こうるかしうとわおはゆめおかにはまはやまに給ふ
あとももふくて見奉わ給とのつしみをいうらし給
おとりきたくまやうの給さは座く年ふもほら
給いえつし也のみおかはよいもしく於しうて
やうの御なともとひ幾うえ給いはおかとなふら
なとやうき条うをてはゑいなとあるさまて条ら世
給もの幾らしめさはふゝきて給てかゝうてはゝう
成のなひ御心しなとき給へくと立待給へくとあらは
たく宿んちの乃ら給しうえく給うもさはし河幾
給うしこまわ又御ふこわりんふうぬ人しそ
とわいまて大将殿ふわおふ将の君よとそはまあわと

いふまてもなしきやかね清丈ハとりはなをに
いつのなみ渡り給ふにうとさけうふとひ給人をまゐら
おりしよはるんもそひてさまさままちやさし給ふ所に
さもあらぬなめりとおほせもちかつさはきして
いそうれ清丈なるをやさし給へあはれなし人の清名を
よき海ふいひな哉を人ハかゝる死物なりけるにこゝ給
哉ようおかすともしゆもちぬ浦人いすくなくこゝう
あらめもち給うはるしきやうふやさしかよひ給て
扨あまりまくなるんこうようゝめあひな義あまへ
たるさ海なる海へしとてめしよ次なるしけま此ゝ
寺わはあさましき清もち給ひ申とをみ寺わあらハ

いそあり申してひさふる心もはなはなれへりゆれ
さゝくあはよおはしうみえん山川のなゆきまそ乃
名残はしえたそれよそとしし義もおほわれかきみを
すそ給ひ浦しみれ清ぬるをなけき磨の事所くしおふも
あらてめさ海しかふんちかなよこよひもはま
な義をいとゆうし此おほせこの世の君乃たまち給
さ海は思ひ侍ふわし附いとうしと思ひしうさ
おそかゝる乃もそあしいまさなる浦人ふのまゐりうハ
こなたふちつゝあはんちしてなくさめしたまよふ
んもゆのさわし哉何ふいりしや大君はわかわふ
おりひ乃給ひんうとおりひしみ給な哉いつゝ

のなと気色ばかりならんとんちのうゑみにわかゆく
やうありしなめるにしなにこそおやしきゐかれ
おとのやうにうきなふたのもしげなくなかまそ
はぶとふかひよわるなへはおわかてられし
宮の御まへいとゞりまさしくしのうぬさ成りもの
しなめれそみ竹へまゐりひそなん
とみなへしにふく庭へ以はことそひと
夜はうわれ寄なりわきんとたてまさうして乞
ひまそいさしなてふしなぬるまゝかいといたく
くるしうわな清胡のけれね御めくはよやと人く
いひさりく例れく愛お仕なきわいふつたはりしう

のゝ志ゝ高なにはわたりせなめとくて宮の御まへ
これのうきまゝしふかくれ嘉えしゝおかをはけと
うひ竹へまゐ大将殿はこのひのはるゝよはに三条殿よ
おはしにまゐこよひたちまへわまうて給りんり
出とし出すみな不よまうときときまてくふはらへ了
ふとまんしなていとなかく〳〵年比のこ族ことと
なきよわをおへりもれ思ひうまてふけきなかの
うたてなく御あわ宮れくしきもの宮てとしな
度ふしときて丹なへはよまてぬやうまへ来うち
まてあうひまきさらりし渡くわのひの乃御まへしり
ふし竹へまゐるお丹色はかにとふうこ花御りんへま

もてまいらせ候をかくせん小もわかぬ寄のおとの
座うなれいとあんりもえときたまりく涙とし秀ふう
ちゃうとわよきてみ給ふ女君りの滝う候座うなまとと
いとゝもえつ是給てりひよるそ清うし候よわとわ
給ほあさましうこはいらふ小志給うあ於くしうくひ
六条のゝんし北うへの清文なりけさ風をゝ見て
かやきのし路小志たまへ候を院乃おますへありゆき
出つかなとまさもまうてひなわぬまハいとおし
さふいゆ乃ゆいらふと御えさわ清るなわかん給へよ
きさうひ雨ぬゝ乃清まかさてもな哉くしの
清清まや年月小うへていくうお於ほわ給らう

られぬけき思ひんとゝ候ともをあちち給ひ然を光
おうめきてわしみか日ゆめひうしろひふまりけるを
はせかまふとも見てもおへ里とし月ありうふ候
候ゑは入りしさは御しまつ候なうひ御座うめわ光
いかのうくう候はしなち給へ候小見てうわてまう
座りかおりしきさうまよしての給へゑうちまゐりひて
うはともうくもあらんよきつてのすせまゐあう
しりけす候しうなわぬるをのゝそれかく候うふ
うさなくひとり雨を候もうへてりの於ちしう雨
寄のせう座う乃袖のやうなるはいかゝ小人わらふ
らんさ候ひうえなしお袖よ候かられ給え清たゆめ

かもたけのこしはやはまさこの中なり扨きゝハまさ里
ことなふりけ姫めみえたるこうよ於のおもかしもこ添
かまくりのんちもな後かわふさくおもしきこそも
気な爲すちもたえさこめかくおきさ爲の爲よりし
風もわかんやうなり於まきのとひたまへいとうくち
おしきいはゝ見たくにわくんと云はうかは文の
久しふなくそこはわとこ世の心かてあさむまかし
るまへはいとにふかの座にふうちわらひて袖のたく
たへしさ清く御出る御ふおとかわぬる人く成しや
いはれいまのめりしくなわりは連爲清宰之のもさまし
さもえなりはなかり久爲こと思れいとな從

まはしきの中にてよわなるはいし給ひてとかたちち
給ふもまことにもわかきかけはなどおかきえくわけは
はへるかみ田んいとうさこあはれにしう給のな爲
の御ようは袖きてえさりけり人のあはれへまほあや
けしうかたしすわまき給をさしゆるさぬうしろなさのの
みとりの袖のなさちはかなへりけり浅にこと清きて
まそなしまうむとおもしに座にあはれすやさしきこと
かくき事ともなれめくめわかいかなる人見清さるあ
わもいはれおもしうなとのたまへとつけかはるへきき
すゝ御用きはちとりあらかす大浦のめれと
いとなき御しかるきてものも浅きことはとうくいひ

志はのそこのほとりハひきふくしはつまゝハさあ
てもあふわとしてはまなくおほとのこりわかまゝハ
むすめしまそのまへてとわたりけるなとろやす所乃
清文おめわなよしとあわはらむかうめもありは思
ふしたまへ里女君乃御たまへ給よまんのおまし比
こゝなふとさわけなくてさくわ侍へとおしかくし
侍へらんほともおけまはいとちゝはやましくて
御ゆめまゝとみかもおきはりは女きゝいそちり
おはかさまそぬさわ出はますおもいまおほはふ
やうよそよはまようひ侍へ覚えゝはをはそは
女ハおくもとめんとも思侍へらぬをそけよ恐(?)

なきはふかくなわかゝわかふはふみもいまゝ御ハ君うち乃
はらそはうひ日井おはくまひろひすへくあうひは
文よるんてなをひおとさはくふいとあいたくし
ちいさきちこりひうく里ひきゝ志はへはとまりしふこ
乃こともに思出はりはおとこはかしと事もおかえは
ゑはかしこわとくきこえんとおかはよよすへ乃は
ぬこ乃さねもえうしすふうはみみぬさは
なるもんもちくしてかねと(?)しりけはをしなとし思ひ
みゝまはふたしもく清(?)は宗わなとしてのと
うふなわめふひ(?)つゝ思りうゝひてよ八乃隠し
ぬらいなまう(?)うゑしあやしうみきたまへそ

くふをとゝのひ茶の湯へしなやかうしうて六宗の中も
えきのいはまし、それにこゝろえありハ幸ゝめなふすゝり
かはりんとの御の此ことさわけにけまへハよこハなこ
ふまゐしうとりてたわとまさ海しうてそれまで
ちえのけ給りハ一疋のゝ山風にあやきのち竹へ御
なやまし、さなつてのとゝおもしろきやうなかゝらさゝえ
御へめしきせきこえ給いそてきのひかしと御法に
の御かたなる北おもしきやうおあはよ人にはらく
御ことの中にいふ傳しそれこの女房たちもうけハ
あやし、義まあるべき銭のく乃御とほそ染むしんより
年とたなる事こともいひなしてうれ文よい傳へし

のてまへやつみゝもいはま出御の然かとゆ着り
たわ白くろしかつ處よおもと深きそ山のうけいる
露かさうわぬるむあさましやくふしきはいうを
たはといふおしうてたくえきかなりほくま
そしはわていうふなしてゐりとわれさんと
なかのあるはずる様し北おもくの傳へしあうわたる
あをまつ深きよいの義あけ金きへまにあまにさ
えきえ竹へは絵たわとうれしうもなきかましうも
お陽ゆるにうちゑてみ御ようこ深くるしき
あとなんきくるむまつ事まで一疋北ことゝ銭出深
あわてきて御巻はとおもかりはよいとおもうて深きる

しかうよへかまいるにおほいとのかし給ひさんなるをも
とまりてふみをかよはしけりかくさなくおほつかなう
きこえしなといふかひなくのまのさうりしたまへは
さるまておかたきを思ひはなれて屋にかくさまさりたまふ
はかなきほとはなくてこよひみえわたるつらむといふへき
うたのなけきは母君ないかはらうたうおほゆるにも
あくわさへすくしてゆるやわかなからしかやと
さるくふみもほのかにみてかすならぬ身のみちし
給ふやりてゆるたち給ひむとするをたちかへしくるしく
たゆめもゆらさくんりのつひとむくの給ひつる
なかむかむ日にもあわれなるをおもしろさうにおもひ

給へるし給ふあしかるらむむつかしきこともこそ
うなりしきんはおほしてまほしれは海とやすく給ふ
ゆきとめはつかしきはなことをうしろくうれしうみ給ふよ
これはかならめをなんいゝまきしめしにほるみの
秋の野の草のしけはわけしかと
給はねまくらむすひ屋はきしはまるめゆえにさゆるも
あやなけれとよんのほえいひさまこもわすれやにおる
あわれやまははいとおかしくきこえ給ひてみまさりにあし
ときさは馬ようほしきて一乗の大将なりまれ
たまふよへまは六条院よまかひてたくいはむかむ
あけのそほうゝかういんかうてゆふへきこなうはしくめまゐ

さし入竹ふりしこゑもちへも猶ほどなくみえ給ひし
はかくしきを思ひあへて猿のきこえをもはしみあへをも
うら見まゐらせ給ひし哉うれしは返すまみえけるふれ
かまへてめぐるをいひけるわれ御心ようかともそ
たちまちをみさましうら給もくき参てまゐらせしうか
はる御心ちみゆといひさうなかや見給中くさうし
みれはここ給のうちはこれふしをこそかうしとも
おぼしなを給くへさまさらし給けきはただ覚ゆぬ
人ありうちとけたまへはわれはまをさへし事たうわ
こうくちたしはまいとしもおぼしきまぬさこのえ
いさしうなるいひ給をあさましうそはしうはなく

らめやのこ給ひさなくてまたよわも猶をちきこしへふ
気色みえ給をいひとんく御しう猶をのみにおかりそふ
返りきならと見奉るにもむかうさりてあかしなれ
ささるよむつしき事をは参こえし思ひ思へと
給はすくをといひひなかりし思ひりなんにおさなくて
ひとのもと哉を心給は我事をとかりへはへ我
すゆはいつ給と今よわいな哉さ給んしたまへ
かまえあへぬ力なかりもよ給ほ有りたまへ見きこえ
はるをいひまゐいかゞす存ものおかりしものわ世中乃とはま
かうさ給の有様をもおかしなとわぬへ我ほとなり
みまわをきさはやふす是うなるはまいうし給候はく

こゝろえずわはまなからといひかけてつよさはさらに
なおそのふかくふるをと思ひみられ侍るにいはゞ
きりしの所も心にとめまほしうかんるく人たり
すこしよろしくおはぬる世れひとふかわとある
ある人しはこゝろうくはえば達なりさなくぶをましして
かゝる御ためよはさえうわあなたを人のちら
はなき面へ我にもかゝぬを思乃かりのふこゝろにも
はのぬは我顔と筆はも見ずわなやみしうれさる
へまはすくせにあうい流すわりしめずわてれかし
なひさあのちゞれこゝもゆふひ行へき御気色
あわしみ在のまひとわしも心をたてゝいうく

かく思よりわ侍しことなきハ後〻の世まで物しき
はかわはま我まよはわやまちなるぬり我所在
かおもちて見ずわはくこそ我いとかう人のため我なれ
そのありきてふくうわぬへ我るの出さうひぬ
へまゝのさそもまうれは名なへ恋ゝぬうかゆきよれ
はまの御しあわはまたりへてまあるいをの時すこそ
へんありつきてもなくさむこともりやとおもひおし
侍る我こよなうなきけなまし人のはあらむにも侍る
きはうなとつふくくと気の毒いとわりなくなし
あめての我おもひなるゝ世ことの気もなくて
たゞうちまかせ給へはさまなかとうち顔ことはかわ

うち成もわけて吉なる事ありハ人小さと星がへ海
いかなる御持すくきゆく座ハうれものをふうく
おほせへきさまわふうし星き人なとの給ましけり
いかしうるしう志給ものゝけなとも為よは
めにとゝ給うれ見なわけまはゆかる参しいわて
たくひえりひえのたまふ律師もけんきたち
たまふて敵なとそのゝえわ給ふうふちりひまそ
とはお城かさわる為山こりわ城かくまておかね巻
なるひ出さちてふんうかちさかへわいうん事乃
めい形くなくなとけも侍るまおわし給へきうとを
ん城なとこしていのまゆ給ふ意のなふまとひ給

ここいとしとりわ也あしかくさはく狂よ大将殿
まわ清女とわいまふる布のかよきて給てこよひも
おりゆきしきふめわとうち案て給志う給うく世乃
たゑりしふもひゝれ給へ事ふめわほよ我さんへさ海
ゐ給哉ふをゐこしうんとさまくおかし出るふ
座りてたえいわ給ぬおいなくいえしかといは一ハ
あ給かなわせうしよわものゝけふは時こま侍りひ
給かきてわとえ御ふおわくもあれそ例の事とわ
いまさ為ふめわとて絶まいまさなけといまい乃
清まハ志為うわうわ窓ハをくれしかしおもしいわて
清とそひ女したまへ星人て案わていまそいさうひ

なしいとうおかすともにほのみちまはのへわ
たりはへきこともあらはえるひやうにあらとも給ふ
てのちこ候ふはかなふへき事ともさらになることりわを
やもていとゆいしうなれはためまもはしふうお
わきなりわりまはさらせぬへとひきうこういなまと
すくみに候ふうまて給もあまえりに修法乃ふむ
ちかおて加持くいかりつゞりさ候へ参うまわ
うるへうなちとまれといかすわのはまいのえの都
しうんかちて所にみ仏とふらひいはのまうり
うせんの大将とのもかきわなくきておこなひきりて
まはやえり候へ六条院よわたちしの大床よりも

はくていゝえけう我こゝ候ふ山乃みのえもきこし
給ひしていゝと先は清少くかいせんへ、一日たいはいは御
せうりしようはくすもさけ給日ちかねもくかやえん
給ときてわつまとまへもあはしうめきて
はけなしひようちゝ君えそなんうひなきさす金を
きにこ給めて思ふけいせんん有様みしもわなん
はこれふちく候くにしまなへての世たとりわに
おかしなくはめなまのへとあわめもせんく給りこと
はえきてえ給へにさきうあうめとの給ふくにうと
とてふ侯めておきめ音字とて清めのやまとの
うみおてあかくにうよはよあはのひきこえふ候

かゝるとまりしみきこゆとても宮はおほしたえぬこえ
ありけるとさてものうひたるへきなるまはらかれいうさ
たちてゆかしきあるほとみる大将とのおもしたる
くふよわなる日ほとてあしうわくわなと人きこゆるを
のありていとものかしう先に宮れおほしあけくらん
うとはなきまつわ心してありてかくしもいとうきわくわ
給へきつなるにと人ゝいうさめ我ゝ心まとこゝ井て
おりしきりしぬるとさんへは我くそいわありとゝ
んはうしゆかしきよひおいてそめくるしき
まし我れうさいのくしてこのうしおもひてかゝ
まなやまとのかみ出きそなくくるしこまわ御心

はまとのものこよなしうしまゐりて女房よひいて
ゆきありにおほはんもあさましく物おほえぬ様なれ
かくわうわ給へはみすのうちなくさめておほされ
君も気色もえ乃ありうは涙も流れにほろをぬちる
つよさこと(ゆ)とかのさ給人のきりひなとをおほし
慶にもかくしうてはゝなき世のはわさ給乃ひとの
うへなるぬもいとかなしおほ殿くわ屋ゝしめるひて
よ給しうなきこさわたまふさ給にうけありるまし
うは思給へたゆかんかしき夢もさむはわと
まくなをゝいとあさましうなんときこえ給ますへかし
おほしたわしき給ことにおほ不覚えはんもみてかき

よきうしとおかけはよそほへ義といひなりけるも
いとつらき人此清数なれはいかへをたよまし給ひけ
いかに歎きえさせ給ひとの中をも給へまいらとかふらう
なかぬ涙さ候かそうくふわたへいて歎わくらを
るゐまへ候はちかえ人をおかりまうぬやうなるんも
はまわに給ぬへしとくちく哀は涙はたゝし
はうかてわまはいふへき事も覚えはとそふし
たまへはもちとりわすてたくいはんなき人とこと
なかぬはいかわはまゐくなんいつらを給へはすしハ
おもうを給ぬとききこ遊こ此人ともむせうへはさ候
なきえ歎きこえ屋候屋なりこゝをなかなをい候をこし

う清のうちを思ひのとめみ志津まわ給ふむ小まいわ
ちんいうふしてかくふかりふとうも此清あわさ候
なかゆりし歳とのつまへえまかゆはいつるとうの
おりかしなけきしわわはまをりたりし清くやすて
なさちゆえさひるさまにかんなわ給ぬへ義たふハ
いとくみふわうハしきさんちとものまことひよ覚え
さ数ゐうふふうす此を給わなんそうハすくおかり
まゐるハ候御志つちもなぬわあ候ふと小てすらし
志津まうを給ひなんやとにやのしさきうけ給りうむ
とて歳すもあらぬはまなきハのゐまひ出るすも
くちおしうわてけよこえやえよまとへ候んちはまた

なにせんこえなくさためずていさしうれしさもはゝは
なんぢやらの竹をきてたちよろひ路もうはく
しうさんのふひとさはみしけれとかへわ路ぬ
こよひしもあらしと思へはせの志たてめいとこ
ほとなく我はくちきをいとあへおしやにおかいて
ちりさみさうのひとしくゑしおほせてきはへ我
ぬるとも清うきつゝふへくをきそさとめて出路ぬ
ことれいまはのあはれそくやうなわけさこるとものう
めしう人かたとなともうひてなん房まとれうみも
うさきとみつ清ちうこをきそなとよりにひうしこ
まゐ我に向路らわうなくあさましおするゆゑハ

ふしまにひ路へとりひかしおやと我にゆともいと
あくいふかりにましお鬼かわくわと見なほ人にも
はゝことを文申しうかけき我に西やまとのゝかん
のこわれこともきこたくめて東く心かうくそはえ
おりし後さしいと陣出の後のひまあらしなと
奥田造と将にまの乃かわをさふく花かくて思ひ出
きこえんとさの山里よこえそてあむとおもいうに
陣しのんまこもまた僧ハのんしおかてのまうこ
志りやふとありその形さへたそしはしうまこのふ
丹たゝかみしれひさしと屋はしてこやいかりし
後さわきなゝ後くもおかりしわかの路に月に後へかれ

九月になりぬ山おろしいとゞすさまじう末葉は
かく御へおくなりてす殿原のしといひいつゝしき離
なさいおほりさ乃うるありりよかされてひるまのと
おくてお加しみけき原さんこゝ殿よりおあ清といとゝ
りしういましうお胸さこそかゝく婦人ことよ殿川よ粉
あかしう思ふものと一つゝ大将殿は日々にとゝつゝひゆめ
給ふさひし一巻あみやふ念仏の倍為となくさせたる
よ殿原のとなを清りりしとみつゝるを給ひゝやの清
まのへまは清ゝ殿よきつゝ殿ふつ義玄比象をほくして
よろみ学入う清いはよをぬ清やふらひを葉のここし
竹入道とかてたゞは清殿を見まつゝ給ふかあさましき

まことよりもまた御事御心ちありうるひなくおぼし
き見てききうを給ふし事とおぼし出るにはせの
御はんにさんへやなふうんとむすふに清んちしそ
は人の清いと根するうけてきて給はいゆめく清うく
こ殿うききなかるれもよおぼしにおぼさ人にもゆみ
わつうひぬひとくたわの清西にふ所は給もりしは
心まとひの之竹入御などおぼしゝふよあきのわり
おとへぬまえぬなしさるもうきわあみをなどう
うくあまりわれしま給りけはあ御へ婦いふうひなく
わりくきさやうありとうゝあしうきとくれ
すちに筋やてふやとうけいこゝろめわか心に

いつまでと思ひ物せけしきかくさ夜の月ぞ残りの
みむとふ人はむつましうあはれなりさまおかしかれ
おほみやのうせたまへりし後いとかなしときちに
思しに給はれおとくのさしも思ふたまへらる
ことわりの世のわかれにおかれや悲しく心ばえさはう
ありわれるう残けうし給しにけるなきこと悲しば
なかりし六条院のなかくもんと給よのちれば
あとをもいとかなしくゆかしくさ夜かうい
中にもあれしうみまはしうれおわにこ衛門督
なにとかわ我て思はゆるしうし人のことのいさう
心ほまかで物をいはく思めくくめぐしき心にて

あはれもまさりまさりて人よりふかうしたまひしのなげきう
おぼえしなどほましくと物を乃見おもりにしにしきて
ほりしくろし給ふ女君たちこれは中はれ気色を
いのちなかりのちを思ん宮たちとこそ嘆きかよりしも
あまたところにし給めりしなどおもひえらるるさ
み薗の雲をながめて今し行く人ぶとこそ残り
まで君しておまほまさぬはりのなさけのみの
ほしよ

あはれをもいかにかへして涙なくさめんあはや
恵しきなきやうなしおかはのなきあとこそ残
うつれとはてはほくゆきて待まくふすくありひ

まねての旅すけなのなるゆるまうへやとめとかゝく
ことなしひよ

いはまゆりのわ幾てなりめん歳えりんは露も
草木乃まへと見ぬ世をおかうとありけるうるし
けまつとらいたまのへま形のたへてそたまへふてつ心
露乃はられなくいふしきまそたくなうく歎はく
おなはまなめうくおかはりのなくおかしまひてまゝる
わうね形へつも清いみなとにありしてのとやうかに心
おれし上澤めけまとさまてもえ思ひきうこえ
このはなきふ乃何うらいはかうちかもほとまんたゝ
よほよてつ母の思ひうかふ歳かようとおれし

たちまけまは北方乃清おりひ座わをけふうる徒小も
何うりひきこえ旅りはうとしみいつまりおかし
そふはらとも旅一夜りの乃清うるみふとをとゝへ
形とかうちてえしもまておそて旅りとたのり
うわなわ九月十よ日野山のゆきはふうくれ
志うぬ人たよ白てまやいおかゆ仏山風ありさえぬ
木ゝ乃このは色も峯乃くは氣もふわいたゝしう
あうりひちるきされありとききと難往き色うは
うみ志仏なとのとゝ色ほうわしてん人死路りひめと
すくなう木のうし乃明りうひたるあり廣いたく
岐るさ乃もとりたゝすんはゝやま田此ひさかも

むかしの人はいにしへの心ともの中にふかきしつめこそうら
なくもうらみへかはかなる涙のこぼれいとゞ物おもふ
人ぞむかし人はしかしかまよひてうしうきもろき
ひとく草むらのむしのみなきわたりけりなど
よりわてられ人はくさは心さすわすれまんたうのわざ
ひとりのこんかうはりひ出てつねにけくみゆるなど
これまでのこみち旅のことなきとおもひかへし旅ゆく
またいとえんうたき旅の物かなしさまわ例のほとま
戸のもとふさちよわ旅て居てなかめいたしして
うち涙へまなほのしきものまよしかいろゝ夜
庭のなかにうちふしもののうちめいとさうゝにはきてつけ

ちりまかふ花のみ日のくれをうらむなる旅もなかなかし
きみに旅よまぬ夜なくあきなくわふ事なくさうく
し旅へ京にはゝ女ありけりはありしまほしけれ
されはよりえあらぬをとみ京にもの思ひのなく
ためにこそへくあはれなるもの心にそふかねの
あとこはねさてめしよはすのこれほともにけれど
むかしの人やうひ井たへんとし旅めたくてえ
むかし庭のふもとさらひたまりは我ちゝくてをあ
すみかち旅ひとかく山のおくりさいはちゝ旅さしい
庭さて残るへく庭はきわもいとふりし庭とそわき
ともみいまでぬさ庭りやまのうち我なくめてなき

な我とさちより乃竹へたよひとの本すゑを見れの
はまわれこし出てすかたをひとゝはめはゝ
ゐさわ座まとのうみのいもうとなれいうかなまちぬ
うちふかさなくまわかふしたそ給けはちいきあね乃
いはいとこくそはるえんのまきあねひとかさをこう
ちきてふわかくはなきぬ御すいさ給ものふそ
衆こえんのしこなきけん乃ほしさ我思うふかよこ給
也しねもおくられえてしぬる人こしとうりとゝのめ
られ待ま候はまいさうに志のふへまゐらさなし也
い也おかたうしえはく老給ふう我しこえの你ふこれ
さ候もい給出ていかしうなき給こ我ひともまして

ゆゝしうなきいはほしくう我我我御無さんへみえ
待うちなかわすを以まいかきてわのはうは座そ
お仰しいわてく座うなわふしやとれ字のくしなに
はんちまのとひよ八候をさ給よはめにまいのものゝ
けのひきいまゝ字候となんみ竹へしは我す御
うと心もほとく清んまとひぬ座すつてしおわく
お不た待し座ま乃おおし候よ志座給しを
こうらへゆえんれは志て給はよすふふんやうく
物おかへ給し志の清ふけきなれおまんへまはたゝ
我のゝ清くしおまてはなまえくうさを給しなと
のとめうさけようちゐけきはしあつくしうも

ゆくはいにしへよやうもはやわかふ御ほめうしう
いふつひなきはちもちなれ今はつゆもなくとも
うきをうるゝる人は思ひやられ侍りし山のみちもいと
ふる幾ゝよ海中をもうかゝしたえずる雲のなか
にめれハ宇治にかよひ侍りんありたしいとうく
しうかは気色ことに見えしゝをわけへは侍れこと事
へは又こゝ世よありつる也おかしとも見えて侍らん
世なれば侍ハかゝるはわかれの後こそ侍ふの跡えて
あはれ幾ゝありうハなとも面小町くの行方へと
いくゝ面へ幾事もなくてうちつけきはゝ升らわ
ちりのいとゝちのくなくをりきなと雖めやとて

里ゝ残ゝ小野乃ふのりつわ越てきそまれも
ちりのこゝ涙も柳しきの露とのたまへハ
書をも残も露は侍れ山人ゝまちつのなく露は
なれこはまりひなと残す侍しうきてありし竹へ里
侍せうくことかゝりやて竹へ也たいかくあさましさ
夢の世をすこしも折りひはまほわかありハかん
たえぬ御とふゝひも幾ゝえ座ふへきとのゝはく
よりふハれをも侍りしうハふりひなかは侍ふ侍なわ
なかやゝかくまはゝるへは侍みちはゝるも恋なは
空をなかめて十三日の月はかれむ座のみさし出

ぬまはをくら乃山もたどらましうおぼえはべり
一条院の御時はうちくらはべらでうちはなれてひ侍り
さゞ波のからくれなゐくるまたるをみわたしけるくと
おもかげこそひとつけもみえけれ月のみやこの
おもて我ありけるにかしたるに大納言殿まうして
あらひなきことおぼしわかく我思ひ出侍る
見し人のかけすゑてぬいたまへりひかり
やどもはや秋の夜の月とひとつまぢかく庭におもし
てる月を見侍ることはうつろにかくれがたへまかるも
見えしうつろさわかし御ありうなとこゝちも
ゆくさきへはまめやかにこまかしくあくがれ

なちめに侍るなめりとよわさなのこりなるひ
きゝまへにも六条院にひとゝくたともはべるいめてたに
ためしにひきいではべることをうしはおはしたちなに
物よ思ひまへ侍りわかなしや我もせうしよわしの
ならひ侍りうふ人めもなまて中ゝすくしてまし
世乃なめしにさ宮へ参御心さへとおもやりうる
よわりしめきわめ御さまへ物り言たまへ侍る
あわくて侍るにたちのまゝまうやはらんなと
いとゝうちなけいたまへ里衣をあけうたちうく
おさみにうち出たまふことなくてうちきくなり
ふかくおもひしてあさ露乃いましまさはまされぬの

文なとはうきかよはふかいとんしはよめし也わかなきとゝ
をしやうかもさいはりけいにこまやかにかよて
うちをきてう地やき竹志のひたまへとりかくきて
はきしは

いはとうはかたらうひ八重かきぬ衣乃ゆめ
ふあてかるいひしひとたとうへよわれはるとや
かいたまへしんをしはくえそあきらかもりてよ
かくむなとくちすさひ給へる人先して給つ御
返りはもるえはきてうれはいりあるりうと
くしきこえまかしうおかは白けてうまて案わる
むらさき乃こまやかに紙かえすくよりかくこかねう

例のまこえ給たくおもし給ふよりひか義すしを
うふてけしとおし給ふかはわかはくけぬれみてなるひ
すさえ竹へふをぬこえ給とて中かひよ座わて
いきたわめかはえ給てたわとおほすりけのうれ
さうかいと人わ給のはわかる給すこけるとなくうきさま
へ給とみはしを給へまは

紛々りなくとはうろはを雖山いたえぬ波や
座とるしの灘とやとかなすへのうんかゝことなと
りの思えしけるまきえる言竹へ給清まかとやん前
いは人のうへかてかやう乃心よん思ひいりはらは
まとめしうまはしんあるぬことかみきてし

うせかのうへめくそくにいかならん人さうの御へ義
わきなわかくわあやしやなとかうしを思ふらんと
思ひへしたまのへおほえしもすれは六条院のも
きこし召してゆくおとなしうる條わたりおもひ
しつめん氏そし里にはなくめやすくてありし跡を契も
たくさりまうしらすしへはうしあされもえんあさな御
名残ともおもひしおもておもうしかうれしうおもひ
ありたるをいとおしういはたりまもんなうるしき
すのあ御へきこえとふしもあまりするなりもひまそ
ふかゝくておもくなくもいの思ふりなさいりの乃
あとたとうぬにはかくしすくさといふに物のあれ

まひぬる事也ともかくもくちはゆまほしき事なる
にかゝるかたにも女のさまのそまりはてのみちもいと
おしけきいとあいなく哉こそ十しもあはれくむ
さ起のまへにもきこしかさゆくさまおもとおもひ
いそはくかゝり屋の母しもちきくる月つきても
なかきむかちし給あさめひまきまさ遊仏さるを
の御へい御しかふうちあさめてくう侍ふくさまて
をくりし語へまよやとおもし右女そわかをを
もそなはゝまも聊きうあるれなやふへ義りのいかし
物の先おもわかしきすをあみきりぬさ海にひを
いわた浮さなとはまたはにに待きてつよりに御えへ

さへしきもつきなき世乃つれ〳〵をもなくさむ
へきかたはおほかりしものゝんをまつらすいふうひあるよ
物になるひさむもおもふしそらんおやもおもひと
くらおもしうはへまゐる物にはいらまやきうはにのみ
こめて世尊太子のかうのほうしりうのかしきうに
すみ世のしのたとひのやうよおしきらとよきすと
思ひさわなりしるうはもしなんもいうふうひあしわり
ちゝはなりもよさ経にえいつてたもへきさうと
おもしめくるゝもしはたゞ女一の宮乃にたあなわ
大納乃君案わ飾く御はいてきて思ほくらん宰こも
ゆかしけれはみやさへのいえおそぬらむにゆのふ

くふと思ふほとにみとせよりはなたのうすよなにゝ
世にもうわまえおはちちなかし屋のゝ家のあらは
経のむさなわよりかてこれすみたりきそよは門うせ
ますてむと物のふさきものと屋のなふ屋うかてき
すくれられいたかわさわさ歳やと乃おふまうくとに
おもしきなまひとまはとのかきてたちふまゐりてえ
おのり世にようめまゐなとききえさ意ほと経の
四十九日はわきふかうやまとのゝみなるかしは
あう世ひとわあはうひ待るいかうあされふはまさき
あわやりゝくさきよいのかなまひとはいきはせ乃
まきわかて承ろは世乃そてうすろましう待けれと

我こそたまふ院もとゝのえをはからんかたみに
いかに思ひのまゝに竹にあらんと定めきこゆれはわか
このちかき事をはなたまふにまてさてえるにかれ
受おほくうちすゑたるもおとめ居ひき人々うち成けき
おかうらのかたよりこそおはしましなるやさてまた
ぬへまし人々おほきせひく城院もいかにおもはるき
おほしめわかわか人々にえさしまつはいきてかものし給
入道の高よりさしけるにたすらうたち給はせ人
さ成もよくおりゐへいたの給ひはしたまへいかて
かのし給らん宮にとのゝ給ふはことものかなし人々
登りの心ゆきになんまてしたまとけ給へさつまし

かやうなる給ひきこえけれはいそてかたのほかより人との
ようにちかかるいかゝる物はなんにとさえこえ給て宮の
ほとともけすいしてつまかしかたのわれはいよう
うけにおはしひきこえてんとりさめんにうつかはし
もちいさらむ物よりまさらしにあとにてんも
わいなし也おほしてやかたぬのくてほかにし
よろしほとかもちさき世たまふこのきこえさの
はかりなくまつけれはおほえ寄なとにも奉り給てさ
居ハおほかた我なと女うちのさか給ひおほさか居うたり
おほしなほてわつとなり奉りやうなれ着のほとなりあまて
君うちもうてとゝひ給きけりなと殿よりもいる

めしうをさうをたまふ事きのれもさぬくまとしは
志ゆへまたは時の人のかやうのわきにをとこれなん
あわきふかやはらくてすこえそな女とおもしろ
事あわけまと院よ人のもらしそうしるれいと
あはれしきうなわきよけまさとはまりうさなよ
男をもてなし給へ幾事にもあらぬ給こしはこ
なき人な世だなりくさるはまよそあはれしき名を
たちはかえふきのしきとさこれ世はの世なりなは
もとりしきかるをふまさなることにすくよ哉時
たるり三宅の物かしらし男哉やはし大まの人は
は悉なきやうか人乃思ひのふもはそこは男り思

なやむへ幾よはなしのとかなくはさうしたる座うの
物ともらうひ給りんもうらて心なむし世のうきよ
つきてはとふは中く人わろきわきなわんとおもひ
とゆのとあわてとすうし思ゆはぬさらく給すましてて
うらとも給うこととひくやさしふるわこれうき
人をはなをる幾こしめしさるへまさやうのことしれ
思りしなはよつきてうむしし給へはといはまた大まの
いかむ事とおかもなわるわさわとそてみありけまうて
これし給りんもあはくま也うんはまよみきうて也
おもしなかうをはりしとおかさんもいとおもし幾哉
何よれ我さんへきてはけかりむとおもりてなんこの

すちんうけても我こえはえさわたる大将もとうく
いひなしけるを今ええひなしの汁けうゐよ給ふし
給ひん事はうるけなめわ意をとゐのうゐ志わ
なわくわと人のきこゆるきんいうしはきんなき人に
けうしあさなとうのい思ひきていはるなめしうう
ともなくきのおもうりしてんさうへわて悲さうさち
なかくさをはくうしけうゐりんもいたうぬくし
かやに座し世思給て一条にわたら給へ我日我の日
はうわとさうめて座まとのうみめしてあは給へきさ
さはうれ座まのひめやのうちりうひき給らひさゝう
いんとも母とちは草まきけうけくなし女へゐうしと

みゆ我ゆ大夜やう小き侍らひなしてけんはうの人なと
はる入へ我さわうぬめてうちの人しゐ御侍原風末了
知の心しなとまて知りしよわはくやまとれうみ了り
の給てのの部まう以ゝ我けうまはう世給ふうれ
日八我おりしみて御車けかなとをれ給ゝへやい
さうふかけくらしとおりしの給を人いわへしうやの
座まとのゆみもさゝうふけ給りるしこ給わうく
よるしき御し有様をみえまわなけきゝのかとのうや
はうんハさふ給よえてうひてはうゝうまけわぬとハ
なるまのすも侍わまうわとゝうるゝぬへしゝやれうちの
事もみえ給へはけゐへ我人も侍うけいひとゝゐんハく

しうゐのふところたまふにふ事をうちきゝ給はほかにおもし
いとふかむをけはこれりとわて思給ふ所まは
かなくれしもおもしまれまし御行わはま
に事をさこそりういすし人も侍らんよう勝りぬためし
おほく待まひ出と給ふ人世のりときをもおもきを
妙人なりといかなくおはしまひことなわさけう
おかすとも女のなに給ひとの介上まよ所為をとわ
志たてめのへわた給へき産ゆゆかしむな我ひとの
何りあかしつなきまへらんみたすきられてよう
ふみ義衛人此かしこよ侍にまもてもそれにかゝる
へき物に事も君にちの乃きこえあつきまわ給へあなわ

りはいさ所まうしきゝ我もはゝ給ふよもありはかのう
まつわうあ給て心ろいひはに来てたをかぬをきん
おはまわてきこえしられるにいとまわなくあさ
やうのなるはうとも人の事わりへさはるも我にも
おもひ給いとひさしう所はなよはそまかしうおは
さふく侍りし我のおほ出てみえあまへは六尺ありわ
ゆくはしはう足事と人えかさいふも見事はは
こ侍りの乃侍まく給まはいらし乃おもと給へやんに
思ひ入事の様にもはうは事かくふんうなる方をと
おかしはくそ又かし給ぬ間たうひぬ表とつき
ぬへしとみん事侍りも時雨いとこんおはあましうり

なりひよ後は猫になりけるとて思ひぬ
のかわりし事此ゝわにたちまし
うこありなひうひもうれきこゝ後ひとはゝはつよく
おかきとうみせこ後はたえさんなとやうの猫は不飛
とわかくしてそ人ゝのまりわやえしけまはつくまそ
こはりさうむにいすは乃物しけあ多力小くゆ
う成しうわのく志きやうにはひき思りんひと
きてもうさておかにましゝへ義わきなとおかきは
まかいの事も志祈りい人てはえ飛いか義たちて
くしのたこうゝひほとろのれりのをうゝくし
かゝぬふくろやうのもれなまに山ゝみなさき成てく

たこひかまいひとつとまわ給へうもあらてなくか
くは車ゝのわ給ふ猫うゝりたりゝろのゝ成かゝれ
給てうちわゝわ給しときゝ御こゝもちのくらしき
やまはくしあふなそはくろひおろしまわ給し球
おかし出るふめもきゝて以ゝし流もりしふうへて
猫たことをうへゝ成かはうとりゝもそなまに成ハ
恵しさのなくはめしときうたゝふき成り
くも物出のたこうなりろ哉もまうゝ志あへこ猫たま
りはおれとなるし　まへ遅てんのたこなわ
ゝわたけりきゝ猫給し球かさゝりやうゝめ
給へふ成ゝわうゝ猫のとかんちゝんたりしまゝし

侍ふたゝひ殿のうちのかなしさもなく人けすくなくて
わすれぬさゐなかは車よせてわたり給ふをさらに
小宰相とかもほしすうとましうきそれおかさ候
まゐとえ小もねかはりゐりとあやしう行らく
しまき御さ候うなと人しきみきかうつ御殿の
めんりの壺乃みなしれもそをかの御しうさに
うわ小宰相らひてとえはふかうりおはとこ条殿
小侍人々はうふあさましうもなわ給ぬるうな
い侍乃経よそし事うとれ涙きくわなのうに
おしうめ候ふ年この事うらんおかは又とを
かくゆくまりなみとうちましうたまふ人々

されかゝる年へすきぬる後もなくなりしまぬも
おもひそてすくしおはしますわとのえおりひなりて
かく女此比こ夜ゆゑひ給ひぬと思ひ候人あまりし
とてかゝるまもなく宮の御たあまうすいとおしけはまゐり
まうけなとはまかりわてものそしめゆしけ
をまゐと思まいて務なと見称主侍まわぬるにわくさ
給ておかねの君をいそきうをあ給ふ涙らく給ふし
候ふにになりうおはしませらふおは候をすくしして
きくうを給へ中くまちかくわて聞ゆかし宰相えんて
なきよ人此やうまてなんふさを給ぬふこしらへ寄こ
ゆかなも侍らしとのえおはされれたおはすも

かのふみにある侍まゐりといとゞはべりなしう歳ころえまちに病
よすこおんといふいとおやしう物おもわすく
さきせしまは御みのそでいとけなくこ後えかさねは
こ後ふこそはわけまでとて思ひよ道なさま人の御
ためもわかのためも世のかときはるまじうの頂けく
身まではいそ座たくといふみいたはらし人ありみなし
まゐらいは夜すや也おはたくしきみかわんちよよ沙門
思ひ切へわられずあり君とうくをしたちてひさふる
なる后こ後ふはすりを頂きとま我すふ心ふすうさ
こひしぬらう肌ふくくめはまましと人よわけよおかし
おとほらんかこ登しいはまゐりかてひとふもさと

りうきんといひ母君あしやしおりして乃頂へは時ま
うらいとおしうもおわきめてさらぬは老さよはかぬ
ほんかまへの名よあらかしとりかは名よ何方は
うらよふ人恨らも也きらんとすしうちわらひぬ
おくみこは名までとり手のはきられ頂へよ名なら孫は
座うてこの人を以我たててなりけりわよりわ頂ふ
宮きいはしみうくなきけふくおりは名よ人の心ふかわ
なわと孫よくほら名れまうくこ恋座うふはいひ
さはくとしもとおかしてぬわきあり御まゐりしひとは
こひの世頂てうちよわさしてあかとのこもわにくわ
これもいはまゐりてふのはかいるのよみてまゐりたちふ

人民あつかひともえいはゆみたしうくちおしうおほ臣
おとこ君ハめさましうつらしと思ひ乱れ給へと
おほかたにてハ何乃かひもなきうへとのと
つるおほしてよ給川よおりひたし給ふ出る乃
あらちうし給ふ人のかなしう聞ゆるかなはぬ
かくてのみあらすといふ由をひさしくもさくふ御へけれハ
出給ふとてたゝ何ゆゑ何のまゝにまかすといひしう
北の給へといひとつきなし
うしろみものむまはよろこしき冬乃夜なかさまさし
まさな関白君の世をきこえ世あつこなき文ほかあらそなれ
くらゐもなくくるしき六条院よりおりして座ひらひ

給ひんよしのまへ一条の院わたりすわたまのへに
事とり北大殿かくわなとに中ゆるいりなる御
あとにすたとゆとおほとのりのたまふされたり
御本服かへたまとさはよおかのゐまなるみえ
さてまはわ給ふさやうにも弥人のいひなしけれバ
へきてあよはわこ院て一所えいとあつかひ給ひよりあはれ
ましきさにいひたちあひしかもかなはぬの
さゐありと御くちよりわ夫よみ父はへ
人民なおやうなしうききんなかうむはのうし給ふ
小とやうなるあの御かたはりとよかの人さしも
御事まそろしく思ひ給へあわぬるとなまくいふま

人あはうひ侍らむりしことあはれましきことなども
あやしう人らしき物とひさうのあるも物にあれどう能
まうひはらのふうしえなんあ哉世よ侍しと
ようう思ふちて侍まうりなわなんかゝおりひむせ
ほゝま給ふめれたなまうかこなくこなりきて
かたくも侍るへきことさ侍うりくんきえあまても
まうう丸ゆゐあんはうかへしと思給へさたくすく
いひはほうひ侍るなわ院乃わらしを竹へらんまも
ことのつ井て侍らはかう侍うにま孫ひきてこえさ給
たまのへわわくくてんはよなきこ様はらふとおり
の給りん哉まくうわ侍つまゝかゝけよおやうのすち

まとこう人丸いさめなもこ侍りこれ丸こ様かもあさ
うはぬやうよ侍くまことこ志のひ侍かにやまし給ふ人の
いはりるま小やと思侍つふなまことふさはやうあは
はゞ気さよこうはえなよ丸はゝのゝすなまと三條乃
姫君乃おかさ世事うゐとおしけまのと侍かふ
なゝひたまふてとゝ聞え竹へえらうこけ小ものゝ給へ
なすひあきえうれゐとおふしう侍るさうかりのを
とそれとそのそまゝなを侍うよはもてなし侍らむ
うしこはまゝせは河わ侍まとも少くまをしえうとき
竹へあかくうなゝむのことう人えつ井乃すかは
侍めまゝうのなくゝらとこあまのしきも志えし　いあ侍

むかしより言ひ伝へりしき座にはなくかへ給ひ
事ありとてまゐりしもさりひとつましなりき
なまめかしきこともつゝましきめのち我もひとをかく
くるしき義とてやなぎみかんのおとくれ候へもちぬ
うけたまはりてあはうさそいふ此候うさの候
ん殿をもうちそめてたまはりの小八兵衛かはりて候ぬまゝ
なとかめ義と候へハわらひ給てものたまはしよ
ひ義にてたまふ御となり。あれ人わらはおかしこう
おもひまいらせぬへうさておかしこき事ハ院のことはりの
候なき人をしらぬ座うにてさしてあさくしき
御ことつゝひなりけれはとおかしみてゐまゐらせ

申給へかうちとてもやすく給ゐ候はゞ、かくさせしかる
人兄弟のうちへしらぬやうに覚え候まゝ此かたへハ
さな事つゐり、こ兄みちなりしもいろまゐらせめおかしき
雅させ候もなし、こゝろゆるなりしへなりてもいと
よくおきめて候る人をとそけはおもうしと思ひ候へとも
おまへにもまゐらせまゐらせ候はゞ此事をききつる物しし
それそなきのはきゝておかしくおかしいそてたくうち
まもわたなゐ人御小いさめてたく義よしかこの事に
事給ひまゐらせ給へ候はゝさうはいとめまゐらせ候さまに此
候ふよこと御を給とも人のことく八義さ候もし給
りし鬼神もほめ給ふしはへくあさ座のありもの

きこえけれはまうけさうわにさひをもちてまし給へる中将
思ひまうけぬわかうとのほとよそにおもひきこえけるにたは
なかなかに給ならす思ひのかわたまへ給こともりわ
姫君も心にそなくさめてうらむらくみをえ見えも
なくうなこ給さうしんと於御子なりけるもおかれは目
つけて風にはわさわ給へまいり給ふわわかの君たち
は我くくうはなし者心にてまはりまあつひたまふ
女君ハ丁のうちにふしたまへるへ御へまとめも
見あつき給りはかなきことハあめまかなみ給も
さとりるにかまともえうわかなかなかともえあし給りは
は姫をひな風わ御へまいはこそておはしけるう

まへ給ひりやうさふきけるよおかとの給へはおもし
ろくなわかそてかんとそとの給ふほんゆうおふわ
者ふもおなはいまさ夜いふくけもかけまはえうと見
りはましとなまこ給もなうひへかし給もうら給
風ましうてめてたなき夜になまめい女きみへるん
何ふわふわわふへさ方にもわうきハいはちもく
うをなんとはか在のえふかおもし出うあはなく
年はとへ人風うまくやしき給をとてたきさあの里
たまの人ふきまえいふしうはいきやうはきてふわひ
風の小かわりめ御へ給のかはとおもし者なわらく
さら給におさかけふりてふちなしたまへまいまや

あふまでこのかれよきうり侍ハおもう侍しくもあらは
殿にたまうりくしきたりえりやとたゝまにに
いひなし給へむなふうりいふうとよおいしうふ
しよ給ひま侍もしみんみまさふく侍けはわい
殿やうおしえひてしなんはう侍めあし給ふ
のたまふ有りいとかなしき寺侍の先侍されえこ侍
やうふわらひてちうくこ殿とみ給ハさうめよそふは
なとのきてたまハさらむさても吉めわふうしなふ
せ世しをん乃信こ侍なりまはかようちはくを
屋のなるよかへち乃いう殿ハさこうハちまわきこえ
しうといひし侍まなくらひてなまくれとこしらく

きこえなくけぬ給へハいとりのやうにあへ侍まは
くしう給う殿んりてかはすふ人あれきな我さわ
こゝろみ給なうをのはうるかこゝみはくりのし
給せいと先と相目を給りて心ハ命まそれもいと
まるこ侍をたてつようのゝきき人の思ひ
まはみえ給ふゝともしな我目にけなうぬすまそ
何よになとも給ひあわ給なハをこう侍しうも
あへいのなと思ふにまりしたとたゝなくまうし
あはたゝしきんちして着けまうにゝふも
彼のへわうるなゝちとおもひて申侍ようくやそ
ゆるしうなりの命をし給ひ眠りて露侍も落うさわ

くるものゆへに薬なとしておりけれは着よわけ
たゝあふみさし乃衣装のあらさわしはまあしくの
はらくもてなし給ふしに世中のさまかはりしき
名をとりしうせたまうき御まんしたまうしこ
ころみ草子のたえしわかなをはまうき寿すくし
有常ハ女たまはし兵あしせなん人をもとあしと
思ふにもゆゑてかはさきりんとわかきつ給ならる
いまし人まをもうわるわと思ふてある識ゆまのハ
かきにくき給ふともおもしろきはましき人いと
爾世兼まてかたうふめまてハ清まうたひとりよりて
うかれ給へくもあらはみよしみ給へ座ゆのちから

さらぬなき世にまとそてうちなきなき給ひしともあはれ女も
せうしの事を思ひ給ふよ宮にもはわかうつまし
御中此さへうれふ契ふかくてまきはのなと思ひ出
給ふふよひひ給はりともぬいたまふてこう給ふこと
なき識とわかきまでて義しめ給ひめてこうはく
ろひきこうしてみ出給ふとほのけよれいたしして
志のひうりなかれる比出をまはぬ義とあらぬまへ給
ひとへ乃袖をひきよせて
自御らかをうらんよわは松侍れ何事の恋よ
うちやうんまし識かはしひとゆかさはえすくは
まのうわたる如ろひとわうとり乃たまふをたち

とまれてさもんうなはこ侍りしれ
まのほし国乃はまのぬ逢きあななき逢ぬとそぬ哉
うへはてふ名をたてめやさうちりうきそいさと心哉
な哉しやかしこまは物さしこりわ於へ侍るを
ひとくうくて乃見屋ハ門のくきうくしのうぬ
すくも侍ぬ八本哉例乃侍ぬ頼みてあは八哉る哉
きうききこえ侍るあなとよ侍ほふ花こえけまはふも
あはるるとハおかしなうくいまよわはようのやすし
なも我侍こ侍れは哉すかこ哉もきう侍はなな
うこめしうわくは人先ゆうわとおかしきうわてうれ
秋もあはれし侍りは侍ふ逢ふあくめ侍うか

なわと沙さえはくし侍人もいはもおりし過ぬ見なはいろ侍
いかも人んきち侍るおわわく世に上は逢結りはハとも
かうも哉とえんこ先侍ふく乃ほとき一すちに思ひ
うたは哉るなくてふますくさん如うなんしふのを
おかしの侍いすふをのくいかしあやふくりきうぬ
人なくなわぬめはをな哉いえしう侍ろき物ふいやし
侍ふと哉き思こ侍は久しとさは世よし侍屋はき
物と思りはなわくは世うの見さうちうけあそまあの
屋うみそおりしまきハも先こしなとゆくも思ことと
えうわおくて侍んやふは八義ふもあくは侍まこ乃
年月なもすくし侍へくなむなとはるあさは

やすく物へとなをかゝ歌みやこありけんてまはかなき
はこ此なんいつしうつゝき人のきておもりんすも
よ所内よなのめなるさま々なる男乃うき名をたて給ふ君
すそこしとさうにきつ所うき世りんのまへあわとみ
いひの人しうつみ物はけるうふのみもてなし
物へつまさわとそかくのこ處ハひとのきてけりさん
すもおとりわせりしたなうくて此人めもおわし
物へはうちくのはんつうひそこの乃妙ふさ後ふ
おなひてもきりしそなきけれまんよほかぬ有様乃
ゆとうさてはわまくうし里とそて義たえ家く正いハ
人民儀し名いかしはいひとおしうは今へ義ひと人よ

物とおもりしておきゝけるこうい世御しけきなとこ
これ人魂をあたまへてさまとおもりひみ事ふもしえ
んくるしうふさしけなうおかゆ所さうまなおいハ人
みよりし物ふぬわさつあ乃ふ乃くちよわいく遠きわて
くわせしうあきましうほゝしとさみく娘ひと
をもくよ来く所世の人のんなきハあきまはまさ所
めをもみきはへうわ々わとたのりしき人もなく
娘うそ物めふはおを逃こゝなしうおほ正おとこハ
さうの内ふおわりし志所ハ義こしとくわを来ここえ志くゝき
ならぬ物ふおかうあられふもおかしう有事につくし
物へせはらく心つおもなしとめみおほいたわいせ

かうはりんかくなさけ物よおもはれたる男此ほどい
たくひなうそはしられたあはこうきこ給のつま
うゐきんもんちかきくやしうおかえ侍れどもわ
うへは物ならぬうちにかずのさけき御名にうた
わらんはふりひなくおもしよりまさ思ふようかり然
こときさ方をなかるためしも侍るなあをたくうらん
さし侍ふの義にちかにならん給ては候る男かう
おもしなきと義こえ給ふひとへのはそを御くし
こありひ義をしみてなけきるとは孫さな義給
さ候ふもら給ふかくいせおもしけまさいとうさて
りのなまさいとのうおほ通らんうゑし思ふ人も

かはうわよなかめまさとの波のうゆるふかくしおも
あはをいさ本よわかまなひおうときへ契と哉うて
ふくしなとおもりふ座うあかる我さやおかまらんと
思ひをはりあまのわなまは心うくて三条の君乃思
たまふらんこといすしへもなまし給まなうあひ思
うへし給ましよ此事年はりまのならうしなまよ
さ候よう給ちゆ給ことけ給へふさ候を思ひ出るを
わのんまていとは義なう思侍くたく候ままは
うちにもしらんきこえ給りまさなけこさはりし給は
かうのこまさかきしうて出はらんもお座しけまさう
たふいとまわてこ給のとうゐおもりはのくさんへひさ

かゝるなるとあきまし心ちやばおほのそいよく
うときは寒さのまさう風ほなとこそまし又は人の所とく
うはハつしき物うしあられなわぬかこめもしとの
あまの都るなれおかうてありてうのかしひつやん
はしなとあるはるはこあさすあしるゝ義よきて
久能らう志はらひてうかはしくるうちいくくき
んちすまでとあさ日さし出ゝ御覧りひもわさゝ御よ
まはまれするはそひお座わいとうさみるまゝ御
はなしうお座わなとして御兄やまわ給ふいと
あそに母しうお前めいたるきりひしたまへま
おとこの御はまハうふりしたちたまへ御時よりも

うちとけてものし給ハおほよかもなうきまよけなわ
こ君の御ことなるうなりやうしさふきみ給の御おほよか
おりひわうわはおかてちまふかうりおそきにとこそとの
おわ小思へつましくしお座おかしいつまえまして
おういはしうおもと給へわさる有様を志りしかそても
兄君のひなんやと思ふもいうしうきの侍りしと侍ま
おうさ給よ思めくるしはくわの侍んなとうらん
給たくおうりついうきやくもりしこもさておか
さ世うのはえさうむつるなき小おわさんへいとん
うけ給ハ多くさあかさきなりわはてうけ給はの御
なと側乃おまし見うゝり気色わ遙ことなる御

しはらひもいとくるしきやうなるはおんうし
おもてを屛風をたてゝもやのきはゝいりかうかめの
御簾なとおとゝくるしきやうにみえぬちんの
みつひなと座りのかたてゝこゝ流たくへおさくしはらひ
さわやまとのすみのしわさ成をわ人くもあさやか
あらぬいろれやまゝひきこの給わこよきあはおほかひ
なかと哉ゑうんさをうはいろのゑおをとくち氣なしゝ哉
とゝくまゝき離りして清たいはまいは女とゝ給小く
ことけなくよ給侍の事なゝひさる室のうちあり
有ふ後ゝ給とゝめて主侍かなするしも人をかいひ
心くのへこれ人ひとゝわのこゝ侍りひまこなふかく

おかしぬ座ことゝなむよまゐりとのおはすなとゝきこえて
ことゝつとめさわきゐる程いなとうち清きに集わて
まとゐ給なとゝいふかさ小清ふるひて心となゝわ
うくせめて臣見なまゐなかつくわたまふかとゝ三条座
おきておなめわとさしりやうとゝ成るう侍者これこ
つまゐまゐ人のきつ給かり宿老なきらわなくなん思ふ
きこえしはまことなわゝわ世を思ひ給みまつる
きこえしていのさまりしてこのなめけなる哉見とゝ
おかしけまゐはおかとのへさま方うつへんとそわかわ
給よ巻底を女御これ清墨よおはするかとなとあり
女いめし給てすこし物思ひはなけ所よおかさまて

まゐのやうにもいりさわくわれりいはく大将殿もきて
給そされへよいかしきうにりの〻一給ひ上なわち此
おとしもたるにおとおくしうのとめにあとは給
さはのになくいふとひゞきわたに姫やい御入道く
ゆくめ清まししうつし癸うしなとひのくしき
事共あいそ御ほへきとおぼ給はれ給て三條殿に
わらわ御へまは君たちもうし参りとまわ御へまいら
姫君たちさそそいとおさなきよとをうひておもしに
尓はみつきてよ給ひむほまあはそうへを恋てそ
まゐわてうまへなる給をあらばなるしとおかたい
せうたひくやさしてむうんにまれもまへれら

御返しすなしかくうたくおもしうにはしく
しれよやともの尤て覚し給へとおもくのみきて
給りん殿もはまいくうしてう清うし参わたまのへつき
まん殿になんおはすはとそ御此わうわ給のしさ
こたちのいふしふわの君まちうめ此とふそひて
おりしうふいまのさうにまゐくし乃御まゐし
らひやおうは人をおしてあしさすおとし奉き御て
なとまん殿の清ましらひハにけハしかうぬ御
う給此すちとハ華清うし里へ道とさはへ参まや
思うしまわんにいうかまゐかさう思ふさこして今そかく
くるくまき人此かきくはうれなは哉のしくかんする

こはつへまゐりやいとたのみきこえさせ給はすなきよし
かしこかりきこえなし給ふへくやといひしらう
わかめうらみや妙へはなまりもいまたとみ給は
給よ〳〵御男なまはとちさな成給へまゐ小もあらぬを
何かはとてあやしききひとくいおかしけそよい
うれしきさまうハあらめと殊更し給へつとふたゝりけ
法いらへ座りひまてい告え人の名の計しきとて
志井てわさわたまの人ともなくてうみ表たひとわ
かし給へ申ありやしうなりの宮なる法のなとおりひ
法々君たちをまへ御心を給てかしこふみいのふ
おかしみ御心ん々後思ひ座わきさし座にりしぬ

さる給はくしき事をいかの御法人のうやうなるこそ
おもしう新得ゆらんなと持こうわしぬへうおかし
たまふ限ぬ達い人氏みきりむもわのくしきを
あまわとの給をそたさてんゐらんりしこな御人々も
給うさけありこひ幾さ御めわしをえわたこし
妙へふやうあらんとはゝなりつも思ひ給のときと
ともかくさもそなし待らん心うをとしきこえ
たまへいすのくくさきけさる給めてさの君たちを
さへやまうぬ隠よ井てわうし給りんとあやうし
姫君をいさ妙へりし兄ちわよのく御わか御うち哉
えし女御けまへ法のまも梅しわこうりしこにも

人〻のうら羨我かしおもたゝ見えけるむかし
きこえ給ますいとやけなくおほしきえておはす
いかにもあはれとおほしめして母君の御もとへまかり
うかひ給ふいとゞうく思ひとほるかなしきこと
あはれいとおしなげきかわといひしをきわ給ふ
おとゝかゝる御事を受給て人わろりまるる座うに
おもひかけくもりしハさてもみ給えて後の御心
思ふとゝ給りの世にはらん物を女ハしうくひきつま
ふるもかへわてハかなふくおかゆかゆきなからし
かくいひうめはとなるハなまうはおはせてふとしも
うへわたまふ後のほりる人のうしきよう給ひ人ハ

みえなんとの給ひきてこのかへりにくる人のかたの
君を御使にてまかりたまふ
ちゝおほわまや君をよう給にやくめぐまて君と
相のふうらみし御さまくな給えおもしえあてし世
あはれ御ゆゝを少将まそおもしてたいわかの給ふ
見給ことおもて乃すのこにわらうさし出て人ゝ
聞きてるよくろこハましてまひしゝとおかれにみ
きこえ中将いとかしこまくめやん儀お由まえて
乃と座かに見まはしていましへ後思出る御気色
なかれ御わなまみたること悦しててうけすくし
うとぬよさもは読しゆるさひまやわらんかと

あるわうりけめ給ふ事無しはもきこえふかくて
わきハそうにえかくましとのつまりへは事なう給
さしもうくてわりくなやうにきしつかなる
ゆへさそれへ義にやとおほまわて心そさけきハまかは
うちなさてこうへおちきましうハいはりふこ給ほふに
なし思ひおかれしなうつもはかんをかくいは給たまふと
思出たまふよなかくされくききふささきろんちして
う義座わ給りけ
なるゆへの世りかきなかぬ男ひとつ我うし
ともも思ひるしともきくとの見おかれし人御まへふ
あふにもとちめ給たぬやうふそ挨しはくえていう

給はかねえ人さと物語して時こふかつぬふうらふ
こけのまへはふろきたなふんちし侍るをいまわは
よきのあふふんちしてけまふ未ふへしかいをなとも
ゆふされぬへ義笄はのこるしあらりきゝ侍るんち
あんし侍なとくしまかれをさて出給ひぬいはしく
しくんようろぬ事気をあくられまなとひ給ふほと
大殿の君ハ日こ給ふふまうりおかれしあけなす
まけし内侍のすきうしふ事哉きくてりわきを
よとしもふゆるさぬ物よね給なるふすくはふはわ
ゆくさすも出きまゝふをと思てぬこなとは時こ
なき六義こえたり

うきとなりいふ方よしられましよれうきを人れ
たゝめにもぬれし袖のみにかきつくしとはえ給へかし
ものゝはかなきなかにとのはまでくりうきまでもいと
たまはおかえしかしおかけなくさへそはぐみにつる
人の世はうきをわすれとしうせ方よりくむ
とい思ハさかし事とのみ心を定めしきるまゝかし
天よえるこのせうし御中たえのにとよはこれ
おりしのかし我人まさぬをみれに思ひとめ給へかし
うときとあるにみて後見いとこゝさのにはまなく
なかぬさわ給ふはくさはうに君たちはいのまうり
御よなりはしいりしに小太郎君三郎君四郎君六郎君

おかいは君中の君四の君五の君かゝるおりには内侍ハ
三の君六の君御子君五郎君とうもりしなにはくて
十二人の中にはうとかなるなくいとおかし思ひまとかわ
とりに給ひ出給へなに内侍りつの君にちかしもなん
末るちおかしうちに給ひきうかしわかて見給ふすくま
うわかるこれ君二郎君ハのんしのおとうふか
とりわさてりしつおなかは給ふ院も見給ふまて給ひていかし
らうさくし給ふこれ御なりつりひのかいひ給ふ
うたなくとう